

6月 依存症家族勉強会のお知らせ

依存症の動物モデル

わたしたちが今、依存症がどのような病気なのかを説明するときに用いる情報はいったいどこから来たものなのでしょう？その多くは動物実験から得たものです。無数の動物実験の結果から依存行動の動物モデルが作られ、そこから人間の依存行動を解明していきました。

依存行動をそれで全部説明できたの？

わたしたちは本当に依存症の全体像を理解しきっているのでしょうか？本質的で極めて大切な側面を見落としてはいないのでしょうか？今月から、そのことについて考えてみたいと思います。



するとネズミは麻薬入りの水を飲み

左下のイラストは、依存症についての最もシンプルな動物実験です。ゲージの中にラットを入れ、水と依存性薬物の両方を自由に飲める状態にしたときに、動物がどのような行動をとるのかを観察します。「ファルクの実験」はかなり残酷なものでした。空腹のラットに少量のエサを一定間隔で与えるのですが、エサが少なく、常にエサを待ちながら決して満腹感が得られないラットは荒々しく、攻撃的になり、給水口で水をがぶ飲みし始め、多飲症を引き起こします。マッサーマンの実験では、猫に一定の手順でエサを得る学習を獲得させておき、その後この学習が無効になるようにします。つまり、不規則に（エサを与えられないという）罰を与えると、猫は神経症になってしまい、不活発になり、部屋の隅にうずくまるようになります。健康な猫はアルコールを自ら飲むことはありませんが、このような状態になった猫は水やミルクではなく、アルコールが入ったものを選んで飲むようになるのだそうです。

このような動物実験から人間の依存行動は、満たされなかった欲求を代わりに満たすためのものではないかと考えられるようになりました。

ちょっと待って。なんか、おかしくない？

なるほど依存症ってそんな病気なのか、と簡単に納得しなかった研究者がいました。狭いゲージに1匹だけラットを入れてその行動を見ても、ラットのすべてがわかるとは言えない、ラットも人間も環境によって大きく影響される生き物で、動物実験の環境としてはあまりにもワンパターンすぎないか？そこで、ラットの環境を大きく変えて実験することにしました。カナダの心理学者のブルース・K・アレクサンダー博士が1980年に論文を発表しました。依存症の原因は薬物自体の依存性ではなく、孤独やストレスなど周囲の環境によるもので、その苦痛を軽減するために人は麻薬に手を出すのだと彼は考えました。この仮説が確かならば、ラットが麻薬に依存性を示すのも麻薬の依存性のせいではなく、金属製のケージに一匹で隔離されたことによるもので、ラットを苦痛のない環境に置いて同じ実験をすれば麻薬を用意しても依存性を示さないと考え、アレクサンダーはそれを証明するため、ラットにとって理想的な環境「ラットパーク」を用意しました。
(来月につづく)

6月 9日（土）AM10時～勉強会B（意見交換会）/新館1階ミーティング・ルーム

6月23日（土）AM10時～勉強会A（講義と練習）/依存症研究所研修ホール